いじめをめぐる心性の記述を

センター客員教授（花園大学社会福祉学部教授）　浜田　寿美男

いじめが原因で自死したとして，残された親たちが当事者を訴えたケースにいくつかつきあって，あらためて思うことがある。自死にまでいたった子どもの側の心性の状況と，その子どもをいじめで自死にまで追いやったと言われている子どもたち，あるいは教師や学校側の心性状況とのあいだに，埋めがたいギャップがあることである。もちろんこのことそのものは，誰もがよく知っている事実である。問題はそのギャップの生まれてくるゆえんである。

外から第三者的につき放して見るかぎり，いじめは生活のごく一部の断片にすぎない。持続的にいじめを受けつづけてきたと言われる子どもの場合でも，即物的な言い方をすれば，１日24時間のうち，直接的にいじめを受ける時間は，場面場面を合算してもせいぜい１，２時間程度のこと。いや実際にはむしろ数分の単位であるほうが多いはずだ。無視などは学校にいるあいだ数時間ずっとつづくではないかと言われるかもしれないが，無視の仕草が直接当人に振り向けられる場面で勘定すれば，それがどれほど繰り返されたとしても，合計で１時間を越えることはあるまい。なにしろ授業の時間帯まで無視のメッセージを送りつづけるわけにはいかない。そうだとすると，いじめは生活時間の数十分の一というわずかな時間を占めるにすぎない。

もちろんいじめをこんなふうに時間で測るなどという発想が許されるわけではなく，断るまでもなく，これはあくまで話の便宜のための一種の比喩である。そのうえで，いじめる側にとっては，この時間計算の比喩どおりに，いじめが生活のごくごく小さな断片ですむ。その小さなエピソードは，次の瞬間には別の関心事にまぎれて，意識から遠ざけられる。ところがいじめを受けている当事者とっては，そうはいかない。いじめる側にとっての小さなエピソードが，いじめられる側では長く尾を引く。いや尾を引くどころか，自分のなかで反芻されて肥大していく。いじめが生活の一断片ではすまない。やがてそれが生活全体の気分を支配するようにもなる。一つの同じエピソードが，このように両当事者の心性のなかで，それぞれまったくちがったかたちをとって展開するのである。

こう考えてきたとき，私は，人間にとっての認知と情動の二つの機能の対極性を連想する。ワロンに言わせれば，認知の働きは目の前に起こっている事象を時間・空間的に定位して，そのものに適応的に関係するもの。そこでは事象を全体のなかの部分として位置づける機能が働いている。それに対して情動の働きは，部分からはじまった事象を定位して対応するすべがないとき，そのまま部分の反応が循環して，周辺に広がり，やがて全身を巻き込む。たとえばくすぐりが，最初ごくわずかな部位にはじまっていながら，最後には全身をくねらす筋緊張の渦になって，爆発的な笑いを引き起こしてしまうようなもの。情動は部分が全体を巻き込んで，身体の表現を大きくかたちづくる機能なのである。

第三者的にはごく些細にしか見えない部分（つまり認知的には全体のなかの一部分として位置づけられること）が，当人のなかでは情動の渦をつくりだして，生活をおおいつくす。この情動と自殺とを直結させてしまうのはあまりにも無謀だが，思えば自殺という行為もまた，生活上の一部分がその人の全体を支配してしまった結果にほかならない。

いじめをめぐる当事者たちの心性のずれをめぐって起こるこうした事態は，おそらく常識の範囲で多くの人が直感していることではあろう。しかしひとたび訴訟になると，訴えられた人たちは，この直感を圧し殺して，いじめの事態をできるかぎり部分へと定位して「これくらいのことで」と言い，「だから原因はもっとほかのところにあったのでは」と言うようになる。

訴訟のなかのそうしたやりとりを見るにつけ，いじめをめぐる心性についてその力動過程を，直感のレベルを越えて，もう少し丁寧に記述する必要があるのではないかと，つくづく痛感させられている。